

国際日本文化研究センター三〇周年を祝す

川 勝 平 太

日文研創立三〇周年おめでとうございます。

正式名称「国際日本文化研究センター」は「日文研」「ニチブンケン」「Nichunken」の名で世界における日本研究のメッカとして内外で広く通用するまでになりました。三〇年間の成果の現れであり、ご同慶の至りです。

英語の正式名称は International Research Center for Japanese Studies ですが、私が Japanese Studies の名をもつ海外の研究機関を最初に知ったのはイギリス留学中のことでした。オックスフォード大学の Nissan Institute of Japanese Studies (日産日本研究所) です。オックスフォード大学の希望と日産自動車(株)の援助とが相俟って一九八一年に設立されました。私はその開設記念式典などに日本人留学生代表として招かれたので鮮明に記憶しています。日文研の創設に先立つこと六年前でした。

オックスフォード大学には Institute が当時、Oriental Institute (東洋研究所)、Institute of Agricultural Economics (農業経済学研究所)、Institute of Archaeology (考古学研究所)、Institute of Economics and Statistics (経済学・統計学研究所)、Mathematical Institute (数学研究所) などがありました。Japanese Studies が大学公設の Institute になったことで、日本学が数学、経済学、考古学などと並ぶ学問となった——これがその時の感懐でした。

日文研が創設された一九八〇年代の日本は注目に値します。世界の中の日本の地位が劇的に上昇したからです。その前の七〇年代にオイルショックが世界経済を襲いましたが、その危機を最も見事に切り抜けたのは日本経済で、七〇年代末にはハーヴァード大学のエズラ・ヴォーゲル教授が『ジャパン・アズ・No.1』を著しました。

一九八五年、先進国首脳の「プラザ合意」がありました。円の対ドル相場を一気に二倍にするほどの激しい円高誘導を決めたサミットです。その背景には、日本製品には、価格でも品質でも、欧米製品が太刀打ちできないという現実があり、世界経済に占める日本のプレゼンスが際だったのです。

同じ一九八五年、京都賞が設立されました。先端技術・基礎科学・思想芸術の三部門からなる国際賞です。毎年、ノーベル賞級の学者・思想家・芸術家を選ばれます。数ある国際賞のなかでの特徴は関連部門の「最高の人」を日本人のみで選考していることです。選考できるということは、日本人の知的水準が一九八〇年代半ばには世界レベルになっていた証しです。

八〇年代の日本人学者の研究成果が続々と国際的に認められるのは少し後になります。二一世紀のノーベル賞受賞者の数はアメリカについて日本が世界第二位で、イギリス、ドイツ、フランスなどを寄せ付けません。ノーベル賞受賞の日本人の研究はだいたい八〇年代のもので、す。ノーベル賞は、文学賞と平和賞をのぞけば、物理学賞、化学賞、医学・生理学賞、経済学賞など「洋学」の賞からなります。それら「洋学」のどの分野においても本場の西洋に勝るとも劣らない学者を続々と輩出できているのは、非西洋圏では日本だけです。

そのことの意義は何でしょうか。西洋由来の学問（洋学）は、江戸期には蘭学として、明治期以降は滔々と舶来しました。明治維新期には洋学を教えられる日本人がおらず「お雇い外国

人」に頼りましたが、留学生を欧米に派遣して現場で学ばせ、国内では明治中期から洋学の全分野にわたる翻訳運動をすすめ、大正期には日本人が日本語で洋学の中身を習得できるようになりました。西洋のどの国の文学も翻訳され、「世界文学全集」が何度も編まれています。洋学の全領域の撰取に百年ほどかかりましたが、それ以後は洋学を自家薬籠中のものにしめました。洋学撰取の時代が一区切りしたということです。

Japanese Studies は日本における学問史の中でどのような位置を占めるのでしょうか。日本史を大まかに古代・中世、近世、近代にわけると、各時代の主流の学問があります。古代・中世は仏教、近世は儒学、近代は洋学です。いずれも舶来の学問で、国づくりの戦略として導入されました。仏教は鎮護国家を、儒学は徳治国家を、洋学は国の西洋化を目的に国家が旗を振り積極的に受容しました。

古代の仏教は隋・唐代中国からもたらされましたが、八九四年に菅原道真が遣唐使派遣の中止を建議したところから自家薬籠中のものになります。中世の仏教の新味は禅です。禅の自力本願は鎌倉武士の死生観にかない、武士社会の根幹をなす思想として歓迎されました。禅は、栄西・道元・聖一国師など留学生だけでなく、南宋が一三世紀末に滅ぶ前後に亡命してきた中国人禅僧学者が、北条氏の保護のもとで、鎌倉五山を興したのが発展の基礎になりました。禅は、室町の足利氏も保護し、京都五山が確立したところから自家薬籠中のものになりました。「ゼン (Zen)」は中国音でも梵語音でもなく日本語の発音であり、それは日本の禅が世界に通用している証です。江戸期の儒学は中国の古典の習得にあきたらず、日本の古典（古事記・万葉集）を重視する国学者が台頭するところから自家薬籠中のものになりました。

近代日本の洋学が自家薬籠中のものになったのは前述のように一九八〇年前後のことです。

私の専門は経済学ですが、そのころにイギリスに留学していましたが、邦訳や日本人学者の文献で勉強したマルクス経済学の水準が、イギリスの学者とまったく遜色ないことを知って拍子抜けするとともに自信をもったのを覚えています。

八〇年代には海外からの留学生の受け入れを目指す動きが活発になります。八〇年代に「留学生十万人計画」が立てられました。平成期にはいると日本人の海外留学より海外から日本への留学生の数が上回ります。日本からの留学は六万人くらいで頭打ちになり、海外からの留学生の数は毎年数千人の規模で増え続けており、現在は二〇万人を超えています。青年は憧れる国に留学します。日本の青年がかつて憧れた欧米諸国はそうではなくなり、逆に、海外の青年が日本に憧れて来日しています。

では、海外の青年は何を教わりたくて来日するのでしょうか。一つの事例があります。石川県は海外から日本に留学している百カ国を超す留学生を相手に「ジャパン・テント」という夏期大学を八〇年代から毎年開催しています。カリキュラムは当初は国際経済、国際政治、地球環境などでしたが、留学生がそれらよりも加賀・能登の文化や歴史に圧倒的に関心のあることがわかり、一〇年経った頃から、加賀百万石、能・狂言、加賀・能登の工芸（友禅、漆器、九谷焼）、加賀料理・和菓子、能登の風物、日本人の生活習慣、加賀出身の西田幾多郎・鈴木大拙の紹介などのカリキュラムを組むようになり、それを「ふるさと学」と称し、すっかり定着しました。外国人学生に地域の「フィールドワーク」をさせているのです。石川県総体がフィールドでありテキストです。そのころから日本各地で例えば「東北学」「京都学」「長崎学」「薩摩学」等々の地域学が勃興し、一般市民を相手に「検定試験」まで実施されるようになっていきます。

私が預かっている静岡県では平成二五年六月に富士山が世界文化遺産となりました。以来、今月（平成二八年十二月）まで四三ヶ月の間に茶畑（世界農業遺産）、南アルプス（ユネスコ・エコパーク）、駿河湾（世界で最も美しい湾の認定）、源兵衛川（世界灌漑遺産）等々、なんと四四件の地域資源・人材が世界クラスに認定されています。平均すると一ヶ月に一件の認定ということになり、ものすごいスピードです。静岡県だけでそうですから、まして全国においてをやということです。

学問はそれが生まれた風土と無縁ではありません。経済学の父アダム・スミスの『国富論』は分業と自由貿易を主張していますが、イギリスをフィールドとした経済論です。マルクスの『資本論』も叙述の八割はイギリス経済の実証分析です。イギリスのフィールドが日本の現実と違うのは当たり前ですが、それでも学ぶのは理論を通してイギリスを日本が目指すべき現実のモデルとしたからです。今や日本が諸外国から学ばれるフィールドになりました。

やはり、*Japanese Studies* にかかわる最大にして本質的な問いは「日本とは何か」というものでしょう。日文研創設者の梅原猛氏の広範囲の関心も、中心はその問いをめぐるものといえます。仏教には個人の生死から宇宙におよぶ世界哲学、儒教には『論語』を軸にした人生哲学、洋学にはキリスト教があります。では *Japanese Studies* におけるそれにあたるのは何でしょうか。その回答として梅原氏は「人類哲学」を提起しました（『人類哲学序説』岩波新書、二〇一三年）。

人種・宗教・地域を超えた「人類哲学」を日本が唱えうる根拠は何でしょうか。人類には全体性があります。全体性の根拠の一つは日本古代に見出されます。古代日本に仏教や儒教が伝わったことは常識ですが、梅原氏の『翁と河勝』や井上章一氏の『キリスト教と日本人』（講

談社現代新書、二〇〇一年）が示唆しているように、キリスト教の影が濃厚です。

それだけではありません。日文研の近く、大秦の広隆寺に半跏思惟像弥勒菩薩が安置されています。六〇三年に聖徳太子が秦河勝に下賜した弥勒の像です。弥勒は梵語の「マイトレイヤ」の漢字表現ですが、古代ペルシャ語のミトラ（ミスラ）の転訛です。ミトラはアフラ・マズダと並ぶゾロアスター教の神です。弥勒にはゾロアスター教の影も濃いのです。

そもそも弥勒が「像」であること自体、アレキサンダー大王のインド遠征の遺産としてギリシャの彫刻文化がガンダーラに入った帰結ですから、ギリシャ文化も影を落としているのです。

正倉院の一万点に及ぶ宝物は、朝鮮半島、中国、シルクロードとその周辺地域、インドなど南アジア、ペルシャとその西のギリシャ・ローマに及んでいます。飛鳥・奈良の古代日本には「汎ユーラシア」と形容すべき全体性が胚胎していました。

飛鳥・奈良の古代日本に蒔かれたユーラシア各地の種が、縄文文化と弥生文化とに耕されていた肥沃な大地の上に順次花開いてきたのが日本の歴史であり、いわば即自態としての全体性が徐々に対自化されてきたといえます。そのような即自態としての、日本の全体性を対自化した最新の成果が人類哲学の提示であるともいえます。日文研の Japanese Studies は国際性・学際性・総合性を備えています。日文研の存在は使命的です。

（静岡県知事）